

# ヴォルフラムの文体

## —Knappheit—

須 沢 通

### 0. 序

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハについて、同時代の詩人ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクは「トリスタン」で、「(出まかせの言葉で跳びはねる) 兎のギから」<sup>1)</sup>、「奇怪な物語の創作者、話の種の密猟者」<sup>2)</sup>と攻撃し、さらに「その注解を魔法の書で探す(ことが必要だ)」<sup>3)</sup>とその不透明(dunkel)な語法を非難する。また、ヴォルフラム自身も「私のドイツ語はところどころでよく曲がって(krump)しまう」<sup>4)</sup>と、自分の詰屈(krump)な文体を認める。この自他ともに認めるヴォルフラムのkrumpでdunkelな語法は、詩人の芸術的個性の表現であり、詩人の胸奥の内面的表示である。本論では、ヴォルフラムの文体のうち特に個性的な表現法であるKnappheit——一行の文、もしくは脚韻を踏む二行連句に、より広くより深い意味、内容を凝縮し、より効果的に表現する語法をこう表記する——をとりあげ、「パルツィヴァール」<sup>5)</sup>をテキストに、この文体の分類と、その修辭的機能を分析してみることにする。

### 1. 一行文による Knappheit

一行の文に、より深い意味表現を凝縮したこの文体の用例を、「パルツィヴァール」の各巻ごとに統計をとると、表のような結果になる。

巻	詩行数	Metapher (人物描写)	その他	計	巻	詩行数	Metapher (人物描写)	その他	計
I.	1736	12 (5)	1	13	X.	1500	5 (3)	0	5
II.	1718	8 (3)	1	9	XI.	900	0	0	0
III.	1898	13 (3)	0	13	XII.	1320	2 (1)	1	3
IV.	1338	1 (0)	0	1	XIII.	1560	2 (1)	0	2
V.	1682	5 (0)	0	5	XIV.	1650	3 (2)	0	3
VI.	1740	7 (4)	0	7	XV.	1590	2 (1)	4	6
VII.	1800	3 (1)	1	4	XVI.	1230	1 (1)	0	1
VIII.	1050	1 (0)	0	1					
IX.	2100	7 (0)	0	7	計	24812	72 (25)	8	80

上の表から明らかなように、このKnappheitの用例の90%がMetapherを用いたものか、

metaphorisch な表現法によるもので<sup>6)</sup>、このうちの約35%が人物描写に利用されている。次に、この文体の内容を検討してみる。

第一巻、プロローグ、バルツィヴァールの父ガハムレットと第一の妻ベラカーネの物語。まず、プロローグで、ヴォルフラムは彼の主人公を次のように紹介する。

er küene, træcliche wis, /.../er wibes ougen sūeze, /unt dâ bi wibes herzen suht, /vor missewende ein wâriu vluht 4, 18-22.

(彼、勇敢にして晩成型の人、...彼は婦人の目の喜び、同時に婦人の胸の悩み、そして道を踏み外した行為のまことの避難所)

Metapher と Ellipse が見事に組み合わせられ、可能な限り凝縮されたこの Knappheit は、連続して用いられることによりその表現効果を何倍にも高め、聞き手に、まだ登場しない主人公の全体像を欠けることなく十分に伝えてくれる。敵軍に攻囲されたベラカーネは、ガハムレットに援助を求める。

ir kiusche was ein reiner touf 28, 14.

(彼女の純潔は聖なる洗礼であった)

異教徒であるベラカーネの心の純潔は、キリスト教徒ガハムレットにとって、神聖にして最も清らかなキリスト教的儀式、洗礼と比せられるものである。見つめ合い、話し合う二人は互いに慕い合う気持を抱く。

doch was ir lip sin selbes lip: /ouch hete er ir den muot gegeben, /sin leben was der vrouwen leben 29, 14-16.

(しかし彼女は彼自身だった。彼もまた彼女に心を与えていた。彼の命はその婦人の命であった)

連続した Knappheit は、ガハムレットとベラカーネの誠実で深い愛を表現している。敵軍の包囲から解放された彼女は、ガハムレットと結ばれるが、やがて、彼はひそかに彼女のもとを去る。

ir vröude vant den dürren zwic 57, 10.

(彼女の喜びは枯れ枝を探した)

愛しながらも去っていったガハムレットを恋い慕い、愛の損失を嘆き悲しむベラカーネの気持がここできじ鳩の行為に例えられ、彼女の痛々しいまでの誠実が、聞き手の胸を打つのである。

第二巻はガハムレットと第二の妻ヘルツェロイデの物語。ガハムレットは遠く残してきたベラカーネを思い出し胸を痛める。

wan jämer ist ein schärfper gart 90, 11.

(なぜなら心の痛みは鋭い突き棒である)

周囲の愉快な笑いの中であって、ベラカーネを慕う嘆きは、家畜を駆り立てる突き棒のように、彼をいやおう無しにこの楽しい場から悲しい気持へと駆り立てるのである。ガハムレットはヘルツェロイデと結ばれるが、騎士の冒険を求め、彼女のもとをも去る。ある日ヘルツェロイデが見た夢は、稲妻に激しく打たれる恐ろしいものである。

brinnende zähler was sin guz 104, 6.

(-かみなりとともに-燃える涙が降り注いだ)

この五個の単語からなる Knappheit は、その内容を何倍にも膨らませる。雷鳴とともに彼

女に激しく降り注ぐ稲妻の火花は、夢を見ながらその辛さに流し続ける彼女の熱い涙と溶けあうのである。目覚めた彼女に、ガハムレトの死が伝えられる。悲しみの中で彼女は一人の男子を生む。

ir schimpf ertranc in riuwen vurt 114, 4.

(彼女の楽しい気持は悲しみの流れに溺れ死んだ)

わが子の誕生の喜びも、愛する人の死の悲しみに消し去られ、ヘルツェロイデはこの後一切の喜びを避けるのである<sup>9)</sup>。

第三巻はバルツィヴァールの少年時代が舞台となる。ヘルツェロイデはわが子を連れ、畑を耕し森を開墾する生活に入る。彼女は召使に、騎士についてわが子に話すことを禁止する。

der site vuor angestliche vart 117, 29.

(このことは危険な道を進むことになった)

この極めてヴォルフラム的な短文は、息子バルツィヴァールと彼女の運命を暗示し、聞き手の関心を物語のその後の展開に向ける効果を持つ。騎士を知り、騎士となるべく旅立ったバルツィヴァールの粗暴さは、エッシュェテ夫人の恥ずかしさを呼び起こす。

ir scham begunde switzen 132, 8.

(彼女の恥ずかしさは汗をかいた)

やがて、彼は領主グルネマンツのもとに来る。

des site was vor valsche ein vluht 162, 24.

(彼は不実に対する避難所であった)

このすべてに勝れた老領主のもとで、彼は騎士としての教育を受ける。息子同然に可愛がり、自分の娘と結婚させようと思っていた領主は、バルツィヴァールの辞去の申し出に嘆き悲しむ。

ir zagel ist jämerstricke haft 177, 26.

(それ-騎士-の尾は悲しみの縄の結び目である)

騎士の最後を、馬の尾をとめるしりがいと比して、騎士のしりがいは悲しみという縄であると説くのである<sup>9)</sup>。

第四巻で、コンドゥヴィーラームールスと結婚したバルツィヴァールは、彼女のもとを去り旅を続け<sup>10)</sup>、第五巻で、グラール城にやって来、大広間に通される。

dā man jämer vür si truoc. 231, 16.

(そこで彼らの前へ悲しみが運ばれた)

ここに居合わせた人々の前に運ばれた槍は、この城のあるジアンフォルタスの傷による苦痛と、それによる城内の人々の悲痛、さらに、この後バルツィヴァールを待ち受ける大きな悲嘆を表す。この城における数々の不思議と大きな嘆きを目の当たりに見ながら、グルネマンツの教えを言葉とおりに守り、問いかけを怠ったバルツィヴァールは、その夜夢を見る。

im switzten ädern unde bein 245, 19.

(彼の内臓も骨も汗をかいた)

昔、彼の母ヘルツェロイデがガハムレトの死を予感して見た夢にも負けない恐ろしい夢は、彼に大きな苦痛を与え、目覚めた彼に襲いかかる苦難を暗示する。人影の見られぬ城を飛び出したバルツィヴァールは、彼のため夫の愛を失ったエッシュェテ夫人と出会い、再び夫の愛を取り戻してやる。彼女と夫オリルスの愛の和解は、Knappheitによって実に美しく描かれる。

weindiu ougen hânt sîezen munt. 272, 12.

(涙する目は甘い口を持つ)<sup>11)</sup>

第六巻はアルトゥースの陣営が舞台となる。アルトゥースの円卓に招かれたバルツィヴァールは、女性の誠実を縛って離さない紐に例えられる。

sin glast was wibes stæte ein bant 311, 25.

(彼の美しさは婦人の誠実の紐であった)

彼の美しさはすべての女性の心をつかみ、女性の移り気も彼の前では消えてなくなる。喜びの絶頂にある彼のもとに、今一人の醜い乙女がやって来る。

ir mære was ein brücke 313, 14.

(彼女の話は橋であった)

彼女のもたらした知らせは、喜びの川に架けられた橋であり、この橋を渡って悲しみがやって来るのである。彼女は、バルツィヴァールがグラール城で問いかげを怠ったこと、そのためグラール王の苦痛を救済できなかったことを激しく非難する。

ir heiles ban, ir sælden vluoch, /des ganzen prises reht unruoch! /.....ir vederangel, ir nätern zan! /.....ir sit der hellehirten spil. /.....ir vröuden letze, ir trürens wêr! 316, 11-28.

(そなた、救いの追放、至福の呪い、完全なる栄誉のまったくの無関心。....そなた、毛針、毒牙よ。....そなたは地獄の牧人たちの慰み者だ。....そなた、喜びの終極、悲しみの提供)

Ellipse を混じえたこの Knappheit は、プロローグの主人公紹介における好意に満ちた賞賛の言葉と対照的に、最大限の敵意、呪いに満ちている。今、彼は、大きな屈辱の中、失意のどん底に突き落とされる。神を失った彼はその場を去る<sup>12)</sup>。

第七巻と第八巻はガーヴァーンの物語。バルツィヴァールに代って新たに物語を引き受けるガーヴァーンが紹介される。

sin herze was ze velde ein burc 339, 5.

(彼の心は戦場にあつては城であった)

彼の騎士としての高潔な振舞、勇敢な行為、戦場において勝ち得た数多くの名誉は、堅固な城のごとく決して揺らぐことがない。城を攻囲された父と姉の救援を訴える7歳の少女オピロートの言葉は、連続した Knappheit の形をとり、幼いながらもミンネの資格を得た女性のごとく、誠実にガーヴァーンに婦人奉仕を求めるのである。

ir sit mit der wârheit ich, /.... /mins libes namen sult ir hân: /nû sit maget unde man 369, 17-20.

(あなたは本当に私です。....私の名前をあなたは持ってください。今は乙女と男の両方になってください)<sup>13)</sup>。

第九巻では、神を失い放浪の旅を続けるバルツィヴァールが登場する。聖金曜日、巡礼中の老騎士に聖者を訪ねるよう勧められた彼は、この老騎士の歩んで来た道を雪の上の足跡をたどって進んでいく。やがて、かつてエシュエテ夫人の愛を取り戻してやった場所にたどり着く。

diu slâ in dâ niht halden liez 456, 1.

(その跡は彼をそこで立ち止まらせはしなかった)

足跡はまだ続き、彼はさらに歩き続けるのだ。この道は彼の運命の人、賢者トレフリツェントの庵に通じ、バルツィヴァールはこの人によって神の愛を取り戻すことになる。しかし、トレフリツェントと出会い、まず彼に訴えるバルツィヴァールの嘆きと神への憎悪は激しく強烈である。

min vröude ist lebendec begraben 461, 12.

(-神が苦悩を余りにも高くしたので-私の喜びは生き埋めになってしまった)

was ankers wær diu vröude min? 461, 14.

(-神の力が助けることのできるものなら-私の喜びはどんな錨だろうか=私の喜びは海底にしっかりと下ろされた錨のように揺らぎないものとなっていることだろう)

これに対して、傲慢な気持を戒め謙虚さを勧めるトレフリツェントの教えは、Knappheitによって豊かな表現力を持つ。

diemüet ie hôchvart überstreit 473, 4.

(謙虚な気持は昔から傲慢な気持に打ち勝ってきた=昔も今も変わらず謙虚な気持があれば傲慢な気持を抑えることができるはずである)<sup>14)</sup>

第十巻からガーヴァーン第二の物語となる。ガーヴァーンは一人の女性に会う。美しいオルゲルーゼは彼の心を完全に奪ってしまう。

si wære ein reizel minnen gir 508, 28.

(彼女はミンネの情熱のおびき餌であった)

ミンネの奉仕を望む彼に彼女の態度は冷たい。

min ougen sint des herzen vār 510, 16.

(私の目は心の危険です)

この巻に見られる5例のKnappheitはいずれも、オルゲルーゼの美しさと、彼の彼女への愛を描写する<sup>15)</sup>。この後の彼の冒険はすべて彼女へのミンネの奉仕によるものである。

第十二巻では、オルゲルーゼによって次々と要求される危険な一騎討ちをいずれも勝利で切り抜けたガーヴァーンに、オルゲルーゼはこれまでの高慢な態度を詫び、彼女の抱き続けてきた胸の苦しみを打ち明ける。彼女の苦しみは勇士チデガストの死によるものであった。

ich was sin hêrze, er was min lip 613, 27.

(私は彼の心、彼は私の体でした)

このKnappheitの中で、オルゲルーゼの完全な愛が、また、これまで高慢に振舞いガーヴァーンを翻弄し続けた彼女の心の誠実、貞節が輝きを増す。ようやく彼女の愛を獲得したガーヴァーンは愛ゆえの悲しみから解放される。

sin riuwe begunde hinken 622, 26.

(彼の悲しみはびっこをひいた)<sup>16)</sup>

第十三巻の終りで、ガーヴァーンは一人の騎士に出会う。

er schûr der ritterschefte 678, 22.

(彼は騎士の戦いの鬨であった)

この勇ましい勇士、主人公バルツィヴァールを、作者ヴォルフラムは熱烈に歓迎する。

an den rechten stam diz mære ist komen 678, 30.

(この物語は-枝から-本来の幹に来たのだ)

第十四巻、

der was in strite eins mannes her 679, 7.

(彼は戦いでは一人にして一軍に値した)

二人の勇士は、相手が誰か気付かぬまま、激しい戦いを始める。ガーヴァーンが勝利を諷めかけた時、アルトゥース王の使者がその場を通りかかり、ガーヴァーンの名を呼ぶ。これによって相手を知ったバルツィヴァールは、戦いを中止する。ガーヴァーンは一族との戦いを嘆きながらも、一族の勝利を喜ぶのだ。

hie ist crumbiu tumpheit worden sleht 689, 26.

(ここでねじれた愚かさが真すぐになった=愚かにも一騎討ちをしたがその結果はよかった)<sup>17)</sup>

第十五巻で、バルツィヴァールは異母兄フェイレフィースに出会う。

ieweder des andern herze truoc:/ir vremde was heinlich genuoc 738, 9-10.

(それぞれが相手の心を持っていた。彼らの見知らぬ関係は十分に親しい間柄だった)

ここで両者は一騎討ちを始める。激しい戦いの中、バルツィヴァールの剣が折れ休戦となる。ここで互いに名乗りあい、兄弟であることを知る。フェイレフィースは言う、

mit dir selben hästu hie gestriten./gein mir selben ich kom uf strit geriten 752, 15-16.

(おまえはここでおまえ自身と戦った。私自身は自分との戦いに馬を進めて来たのだ)

二人はアルトゥースの陣営で歓迎される。この席にグラール城の使者グンドゥリーエが現われ、バルツィヴァールをグラール城主にせよというグラールに現われたお告げを知らせる。

du hetes junge sorge erzogen 782, 27.

(そなたは若い-時の-悲しみを育ててこられた)

彼が生を受けた瞬間から始まった悲しみと苦難の生活は、今ここに終止符を打つ<sup>18)</sup>。

以上、言語表現が一行文に凝縮された Knappheit について、その内容と、背景となる舞台を見てきた。ここにおいて、言葉はもはや単に伝達的手段ではなく、また、思考、感情を符号に置き換えただけの表現の具ではない。ここでは、言葉は自ら創造力を持つ。言葉は意味の具体化であり、詩の心を備えた肉体である<sup>19)</sup>。上記の用例のように、この言葉の舞台では詩人ヴォルフラムはもはや傍観者ではない。ともにその場に立つか、自ら振舞うのである。この文体は詩人の心であり、詩人の歓喜、涙である。

## 2. 二行連句による Knappheit

脚韻を踏んだ二行の文が一つの全体性を持ち、より深い内容を含む Knappheit の各巻における用例数は次の表のとおりである。

巻	用例数	巻	用例数
I.	8	VII.	3
II.	3	X.	2
III.	5	XIV.	1
VI.	2	計	24

次に、この文体の内容を検討してみる。

第一巻のプロローグにこの文体は集中する。

ist zwivel herzen nâchgebûr, /daz muoz der sêle werden sûr 1, 1-2.

(疑いが人の心と隣り合わせになれば、魂にとってそれは苦渋となる)

sô habet sich an die blanken/der mit stæten gedanken 1, 13-14.

(これに対して誠実な心を持った人は真白な色に自らを保ちつづける)

jugent hât vil werdekeit, /daz alter siuften unde leit 5, 13-14.

(若者には素晴らしいことが多い、でも老人にあるのは溜息と悲しみである)<sup>20)</sup>

第二巻では、富と徳に恵まれこの上なき喜びを享受しているヘルツェロイデに、愛する人がハムレットの死の知らせが近づいてくる。

alsus vert diu mennischeit, /hiute vröude, morgen leit 103, 23-24.

(人の世はかくもの、今日は喜び、明日は悲しみ)

今、まさに、パルツィヴァールの物語が始まらんとする。ここで詩人は、自分は騎士であり、自分も立派なミンネの奉仕ができると主張する。

vil hôhes topels er doch spilt, /der an ritterschaft nâch minnen zilt 115, 19-20.

(騎士の戦いでミンネを得ようとする者は、法外な賭金のさいころ遊びをすることになる)

そして、自分は文字を知らないとし、この物語に書物を期待しないように訴える。

disiu âventiure/vert âne der buoche stiure 115, 29-30.

(この物語は書物の支えなしにすすむのだ)

第三巻で、詩人は自ら、あるいは高深な老騎士グルネマンツの口を借りて、ミンネと誠実について説く。

wipheit, dîn ordenlicher site, /dem vert und vuor ie triuwe mite 116, 13-14.

(女性、汝にふさわしい態度、昔から今に至るまで常にこれに伴い、伴ってきたのは誠実である)

swer die durch triuwe lidet, /helleviur die sêle midet 116, 17-18.

(誠実のためにそれ-貧困-に苦しむ人、その人の魂は地獄の業火をまぬがれる)

gein werder minne valscher list/hât gein prise kurze vrist 172, 15-16.

(高貴なミンネに対する不誠実な策は、賞賛されてもわずかな間だけである)<sup>21)</sup>

第四巻で、騎士としての勝れた働きでコンドゥヴィーラーームールスのミンネを得、第五巻のグラール城で大きな幸せを取り逃したパルツィヴァールは、第六巻で、がちょうの傷口から雪の上に落ちた三滴の赤い血に妻を思い出し意識を失う。雪の上に立つ彼に円卓の騎士が立ち向かうが、無意識のパルツィヴァールに雪の上に倒される。

der schadehafte erwarp ie spot:/sælden pflihtær dem half got 289, 11-12.

(損害を受けた者が得るものは昔も今も嘲笑である。幸運に与る者には常に神の助けがある)

グラール城での苦悩と妻への思い、この大きな苦しみ、今、彼の意識を奪ったのである。

trûren unde minne/brichet zæhe sinne 296, 9-10.

(悲しみとミンネは強靱な心を打ち砕く)

ガーヴァーンの機転によって意識を取り戻したバルツィヴァールはアルトゥースの陣営に招かれるが、ここに大きな悲しみが待ち受けている。魔女グンドゥリーエの呪いの言葉によって、彼は屈辱のどん底に突き落とされる。

第七巻、ガーヴァーンの物語への移行に際して、詩人は主人公交代に対する聴衆の理解を訴え、物語が正しく理解されるためには聴衆の共感が必要と説く。

im wære der liute volge guot, / swer dicke lop mit wârheit tuot 338, 11-12.

(もし常に本気ではめるなら、聞き手の共感が必要となろう)

wan, swaz er sprichet oder sprach, / diu rede belibet âne dach 338, 13-14.

(なぜなら、-さもなくば-彼が何を語り、話したところで、言葉は-受け入れられる-宿を見出すことはない)<sup>22)</sup>

第十巻で、ガーヴァーンは美しきオルゲルーゼに出会い心を奪われる。ここで詩人は正しいミンネと本当の誠実について述べる。

sol ich der wâren minne jehen, / diu muoz durch triuwe mir geschehen 532, 17-18.

(私が本当のミンネと言う時、それは誠実がゆえに私が抱くものをいう)

また詩人は、おしろいを塗りたくり顔色を作る婦人にも攻撃の矛先を向ける。

swelh wiplich herze ist stæte ganz, / ich wæn diu treit den besten glanz 551, 29-30.

(誰であれ女性の心が誠実さにおいて無傷ならば、思うに、その誠実こそ最高の輝きを持っている)

オルゲルーゼに魅せられたガーヴァーンは、ミンネの奉仕のため、彼女を連れ立って危険な冒険の旅へ向かうのである。

第十四巻、ガーヴァーン物語の終幕を前にアルトゥースは、ガーヴァーンとその妹イトエーの恋人グラモフランツ、両者の敵意を解こうとする。

swâ haz die minne undervert, / dem stæten herzen vröude er wert 726, 21-22.

(憎しみがミンネに入り込めば、誠実な心から喜びを遠ざけることになる)

以上見てきたように、この Knappheit が述べられる場面は、舞台の開幕前か、あるいは幕間である。つまり、詩人は、1. における一行文の Knappheit と異なり、ここでは、舞台に立つことをしない。幕の降りた舞台の袖から解説し、自説を説き、見栄を切る。この差し出がましく強引な感じを与える自己主張を、詩人ヴォルフラムは、二行の、脚韻を踏み巧みに凝縮された詩形を用いて格言的に抑え、これによって聞き手はそこに、もはや das charakterische Ich の存在を意識しない。この文体は物語に抑揚を与え、物語はここで、新たな展開への勢いを得るのである。

### 3. Ellipse による Knappheit

文成分を省略することによって、そこで描かれる像、そこで展開される場面を生き生きと浮かび上がらせる効果を狙った一行文による Knappheit の用例は次のとおりである。

#### 第一巻



hermin anker drúf genæet, /guldiniu seil dran gedræt 14, 27-28.

(白てんの皮の錨がその上に縫い付けられ、黄金の紐がそこにあしらって-あった-)

ir crône ein liechter rubin 24, 12.

(彼女の王冠は一個の輝くルビーで-あった-)

ein durchstochen ritte dran 30, 26.

(その-旗の-上に一人の槍に突き刺された騎士が-旗印として見られた-)

gein der porte er vaste ruorte 42, 25.

(城門に向け彼は勢いよく-馬を-飛ばした)

## 第二巻

ein zobelin anker drunde 71, 3.

(黒てんの皮の錨がその下に-取り付けてあった-)

dervür manec teppech breit 82, 29.

(その前に多くの幅広のじゅうたんが-敷かれてあった-)

## 第五巻

ie vier gesellen sundersiz 230, 1.

(四人ずつ、特別の席-を占めた-)

dervür ein teppech sinewel 230, 3.

(その前に円形の敷物-が置いてあった-)

ê die jungsten, nu die êrsten 240, 15.

(先程最後の-組で入って来た-者達は、今度は最初-の組で出て行った-)

sîn ougen tief, die gruoben wit 256, 23.

(その馬の目は深く-落ち込み-, 眼窩は広-かった-)

dar unde liechte blicke, / [ir hût noch wizer denne ein swan.] 257, 12-13.

(その下には明るい輝き-があった-。〈すなわち白鳥より白い彼女の肌が〉)

## 第六巻

niht breit, sinewel gesniten 309, 21.

(-絹布は-幅広の形でなく円形に裁断されて-いた-)

## 第七巻

hie ein tjust, diu ander dort 357, 1.

(こちらでも、あちらでも槍の一騎討ちが-行なわれた-)

ze beder site rotten ungezalt, / garzûne crie manecvalt 357, 5-6.

(両軍とも軍勢数限りなく、小姓の関の声はさまざま-であった-)

## 第八巻

hie ein schache, dort ein velt 398, 19.

(こちらには樹が一箇所だけ生えている林、あちらには野原が-あった-)

## 第九巻

genoug sô junc, gar âne bart 446, 30.

(多くの者は大変若く-そのため-全くひげも生えていな-かった-)

## 第十巻

gesteppet ûf palmât 552, 17.

(-ベッドの掛けぶとんは-やわらかい絹地に刺し子にして-あった-)

第十一卷

enmitten drûf ein anger 565, 3.

(その中央に草原が-あった-)

bi den allen niht wan einen schilt 662, 13.

(すべての者たちの手にただ同じ楯を-みとめることができた-)

第十四卷

hurteclîche, unt doch alsô 680, 11.

(-彼らは-激しくぶつかり合って-戦った-, しかし-これは-このような結果を-生むのだが-)

ûf einem plâne bi dem mer 681, 6.

(-彼らがいたのは-海の近くの平野であった)

第十五卷

dar ûf bluominiu schapel 776, 7.

(-彼らは-その上に花冠を-かぶった-)

K. Ruh は、ヴォルフラムが特に凝縮した表現を用いるケースとして、実際に目にされる光景を言葉にした場合を挙げている<sup>23)</sup>。上で見た用例において、聞き手は光景を目の前に見ることができ、場面は聞き手の目の前で展開する。詩人ヴォルフラムは、ここでは、聞き手を物語の中へ誘い込むのである。

#### 4. 事件の内容の Knappheit

一行文の中に一つの出来事全体が凝縮された用例は、2例見られる。

第三巻で、恋人の屍を抱いたジグーネは、いとこのパルツィヴァールに自分の不幸を嘆き、恋人が死に追いやられたいきさつを話す。

ein bracken seil gab im den pin. 141, 16.

(一本の獵犬の紐が彼に死の苦しみを与えたのです)

ジグーネに求められるまま獵犬の紐を取りに行き、オリルスに打ち倒されたシーアーナトランダーの話は、ヴォルフラムの後期の作品「ティトゥレル」に詳しいが、この出来事に関しては「パルツィヴァール」では語られることなく、これについての知識がない聞き手には理解されえないところである。この出来事は物語の進展にはさして重要ではなく、ここで多くを語ることは却って不自然であるのに対して、この一行文は最大限に簡略化されながらも表現法においては決して不自然でなく、そればかりか、聞き手に大きな好奇心をも与えるというすぐれた効果を持つ。

第四巻では、女王コンドゥヴィーラームールスが敵に包囲され、ベルラペイレの町は飢餓に陥っている。

si arnden Clâmidês bete 184, 21.

(彼らはクラミデーの求婚-の結果-を刈り取った)

コンドゥヴィーラームールスがクラミデー王の求婚を拒んだためベルラペイレは攻囲され、

城内の人々は王の返報を受けるはめになったのだが、この話は後になって語られ、この一行文だけでは話の全容を知ることにはできない。しかし、この一行文は、前後の詳細な飢餓に関する描写を中断することなく、しかも、これにより、苦しみの原因となった出来事について聞き手の関心をいやが上にも高めるのである。

## 5. 結 び

ヴォルフラムが、他の宮廷詩人のような特定の Stilideal を持たないことは、ヴォルフラムの文体に関する今日の研究で明らかである<sup>24)</sup>。詩人は様々な個性的語法を並置し、あるいは対置することで文に緊張感を与え、これが全体的なハーモニーを生む独特な修辭法をつくりだす。つまり、ヴォルフラムの文体はその全体性において、dunkel でも schlicht でもなく、rhetorisch でも volkstümlich でもない。また germanisch でも antik でもなく、höfisch でも unhöfisch でもない<sup>25)</sup>。本論で扱った Knappheit は、簡潔な構文の中に詩人の心が最も豊かに織り込まれた文体である。ここで、詩人は詩の胸奥にあり、詩人の das dichterische Ich は聞き手の目の前には現われない。つまり、ここでは、詩人が言葉を操り物語るのではなく、創造力を有する言葉が光景を描写し、詩人の胸奥を表わすのである。上述のように、ヴォルフラムの言語芸術は、彼の独創的語法の対立とそれが醸し出す調和の上に成り立つ。その中において、この文体は、詩人の最も幸運な発掘品、最も優れた創作品であり、最も成功した芸術品であるといえよう。

### 〔註〕

- 1) Gottfried von Straßburg: Tristan 4638 ff.
- 2) Ebd. 4665 f.
- 3) Ebd. 4689 f.
- 4) Wolfram von Eschenbach: Willehalm 237, 11.
- 5) Wolfram von Eschenbach: Parzival, 7. Ausg. von K. Lachmann, besorgt von E. Hartl, Berlin 1952.
- 6) その他の用例はいずれも、「あなたは私です」、「私は私自身を打ち倒そうとしていた」のように、二人の切り離しえない一体性を表わしたものである。
- 7) Andere Belege: 1, 22, 2, 10 ff, 2, 19, 4, 15, 8, 22, 28, 8, 55, 22, 56, 2 ff, 57, 23.
- 8) Andere Belege: 64, 20, 80, 8, 91, 8, 96, 7, 100, 16, 112, 28.
- 9) Sonstige Belege: 117, 3, 120, 1, 139, 14, 143, 26, 146, 9f, 160, 26, 167, 29, 170, 18, 171, 16.
- 10) Vgl. 195, 10.
- 11) Vgl. auch 247, 26, 272, 14.
- 12) Sonstige Belege: 289, 24, 292, 28, 297, 11, 317, 27.
- 13) Vgl. sonst auch 350, 30, 369, 10, und 420, 23f. im 8. Buch.
- 14) Andere Belege: 437, 26, 472, 17, 493, 10.
- 15) Vgl. sonst auch 514, 19, 514, 27, 531, 24 ff.
- 16) Vgl. auch 613, 9.

- 17) Vgl. auch 715, 9 f.
- 18) Vgl. sonst auch 740, 12. 740, 28. 752, 17. und 804, 16. im 16. Buch.
- 19) Bert Nagel: Staufische Klassik, Deutsche Dichtung um 1200, Heidelberg 1977, S. 576.
- 20) Sonstige Belege: 1, 15 f. 2, 13 f. 2, 17 f. 3, 23 f. 12, 27 f.
- 21) Andere Belege: 172, 17 f. 172, 21 f.
- 22) Vgl. auch 358, 19.
- 23) Kurt Ruh: Höfische Epik des deutschen Mittelalters, 2. Teil, Berlin 1980, S. 200.
- 24) Joachim Bumke: Wolfram von Eschenbach, Stuttgart 1964, S. 15.; Joachim Bumke: Die Wolfram von Eschenbach Forschung seit 1945, München 1970, S. 97.
- 25) Joachim Bumke: Die Wolfram von Eschenbach Forschung seit 1945, S. 94.